



# 手を使うこと

—— 未来を開く ——

津守 真

具体的な子どものかかわりの根底には、行き詰まり絶望しそうになった世界に立ち向かう自分の姿勢が問われている。人との出会いにおいては、人間を越えた存在とのかかわりが、ひとつひとつのかかわりにあたっては、表現をいかに理解するかが問われる。それは保育以前にあり、また、保育の中で鍛えられる。それをも含めて語ることによって保育者の全体像が明らかにされると思うので、敢えて、それをいれて語ろうと思う。保育者としての私を励ましてくれるものには、同労の保育者、家族、友人あるいはまた、思想、読書がある。その仕方は人によって異なる。私は自分を支え



てくれる思索をそのままに記録の裏側にある同時期の日記から記すことにする。それによって人間の営みとしての保育が一層明瞭になるだろう。

### 新学期にあたっての日記の断層より

新たな学年の出発は、未知の世界に向かつての新たな冒険の出発である。ゆくて遙かな地平線の彼方に、障害をもつ子どもの保育を通しての人間世界の理解がある。保育と子どもの世界を明らかにするという明るい光がある。

### 自分の手で食べる

新学期になって最初の日、T夫は砂場でカセットの穴に木の枝をさしこみ、砂の上を動かしていた。自動車の車輪のつもりだったのだろう。私がT夫の手を砂に埋めると、すこしずつ指を動かして砂から外に出した。指が出てくるとクツクツと笑った。自分自身が顔を出したように思えたのだろう。何度も繰り返し返した。

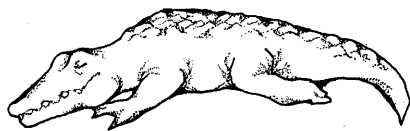
これまでT夫は弁当を出しても食べなかった。T夫は家でも母親が食べさせていて、自分の手で食べることがなかった。この日、私は「お母さん、せっかくお弁当を



作ってきたのだから食べさせて帰ったら」というと、母親は砂場に弁当を持ってきた。T夫はすぐに手を出した。母親は「あ、その手洗わなくちゃ」と言っ、弁当をひっこめた。こういうことが二、三度あった。そして子どもの手を引いて部屋にゆき、手を洗って食卓に座らせた。もうT夫は食べようとしなかった。私は「さっき砂場で手を出したとき、砂がついていても手で食べさせればよかったね」というと、「あ、そうですね」と母親はそのことに気が付いた。母親が夫の新聞を守りたいと思い(前号P.8参照)、また、手を洗わねば食べてはいけなと一途に思い込む姿には愛すべきものを感じる。しかし真面目さの反面には子どもにとっていま大切なものを見落とす恐れもまたひそんでいる。

その翌日、砂場のわきに食卓を出して弁当にした。皆が庭で食事をはじめたがT夫は水たまりの遊びをつづけていた。急にやめて私の手を取り、庭の水道に手を洗いにいった。そして私の隣にすわり、私の弁当をほしがった。自分の弁当の小さなりまきも私の弁当箱に移して私に食べさせるように指示した。

翌日、箱積み木を私に持たせ、次々に四個並べて床に置かせた。T夫はそこに腰掛け、一本の積み木を開閉ドアのようにあけたりしめたりして遊んだ。弁当のときも積み木の上で食べた。もう少して自分の手で食べそうだったが、私に食べさせるように



指示した。

数日後もF先生と輪のなかに入ってくるくる回って遊んだ。昼食のとき、自分の手でいちごをホークでさして食べた。F先生がホーク入れの容器にのり巻きをくわえさせると、手で取って自分で食べた。残りは帰りがけに自分で食べた。自分の手で食物を食べた最初である。

### 切ること——造形のはじまり

五月の朝、机の上に割箸が出ていた。私はそれに新しいビニールテープを通して動かした。T夫はすぐにテープを引き伸ばし、自分ではさみを引き出しから出して切った。床の上に画用紙をひろげるとその上に貼った。どこをどの長さで切るか、はさみを動かして見当をつけている。縦に貼ったり、対角線に貼ったり、何本も重ねてゆく。私はそれを壁にはった(図1)。それから、T夫は、はさみを紙の縁にもってゆき、何度もためらった後、切り込みを入れた。つづいて紙の縁にいっぱい切り込みを入れた。T夫はそれを手に持って動かしていた。縁に切り込みをいれると、画用紙全体が回転しはじめ

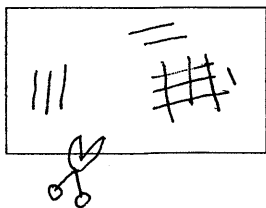


図 1



る。

この日T夫は自分の手でテープを切ったこと、自分の判断と決断で、長さを決めて切ったこと、それを好きなところに思うように貼ったこと、形にならないが、自分で位置を決めて貼ったこと、結果としてはテープが幾重にも重なって貼られ、縦の線や横の線も作られた。これはT夫の意識的な造形行為である。

### 心のゆとり

午後になって、T夫は庭にゆきかけたり、うろうろしていた。これまでひとつのことにとらわれていることが多かったT夫が目的なく歩き回るのは、心のゆとりを示すものに思われて、私はうれしく思った。しばらく後、T夫は私のひざの上に座り、ゆっくりと外を見て過ごした。静かなひとときであった。

### 手を開く

秋の学期になって、T夫はいつも母親と一緒にいることを求めた。両手の拳を握っていることが多い。親指を人指し指と中指の間から外に出して握っていた。硬く閉じた殻の中から自分をのぞかせているように思われた。私がブロックをセロテープで貼っていたら、そのセロテープを自分の手に巻き付けて、手が開かないようにした。



手を使わないぞと決意しているみたいであった。三週間ほどその状態がつづいた。十一月になって、F先生とホールを走り回った後、新聞紙に手のひらをあて母親とクレヨンで手をなぞっていた。F先生がそれを切り抜き、袖口につけてあげた。手が開いた。T夫が私の手をとった、その手が柔らかい。

この日、T夫は母親からはなれて、ほかの子どもたちと一緒に滑り台の上で過ごした。

翌日、F先生はボール紙で手のひらの形を作った(図2)。T夫はそれをもって母親と滑り台の上にゆき、しばらくじっとしていた。それから手に持っていたボール紙の手を下に落とした。何度も落とし、母親が拾って来たり、自分が拾いにいったりした。手を放すという文字通りである。それから母親の手をつないでぐるぐる回転した後、ボール紙の手を床に置いてつくづく眺めていた。ずっと後になって私はF先生に、ボール紙で手を作ったとき何を考えていたのか尋ねた。開いた手がもうひとつあったらどんなにかいいだろうと思ってそうしたことだった。実際、T夫はボール紙の手を解放して、自分の手を開いたのだった。

私は、保育者がこういう保育をしたから子どもがこんなによくなったという考えはとらない。この子どもとこういうふ



図 2



うに工夫してかわったら発見があつて面白かつたというように考える。前者の考えには因果論の残滓があり、自分の力でこうなつたとおごりに結び付きやすい。ひとつの小さな成長にも多くの人がかわつてゐる。そして何よりも、子ども自身の選択と意志が育てられることによつて、確かな未来が開かれる。

この頃の日記の断想より

私は子どもそのものの存在、人間そのものの存在の中に夢想としてはいりこんでゆくのだ。子どもを対象として動かそうとするのではない。その存在そのものの中にはいりこんでゆくのだ。自己実現とは、外から言つた言葉だ。保育は子ども自身の中に湧きいづる思いを生み出す仕事である。